

「夜と霧」

ヴィクトール・フランクルをたどる

日時
2017. **5月20日** **土**
14:00~16:00

参加費
1,000円

当日受付にて
お支払いください。

会場のご案内

ほっぶの森 ホール

仙台市青葉区本町1-2-5 第三志ら梅ビル4階



講師

かわ はら みちこ
河原 理子氏

●プロフィール

『フランクフル「夜と霧」への旅』著者(2012年、平凡社から単行本。2017年4月、朝日文庫に)

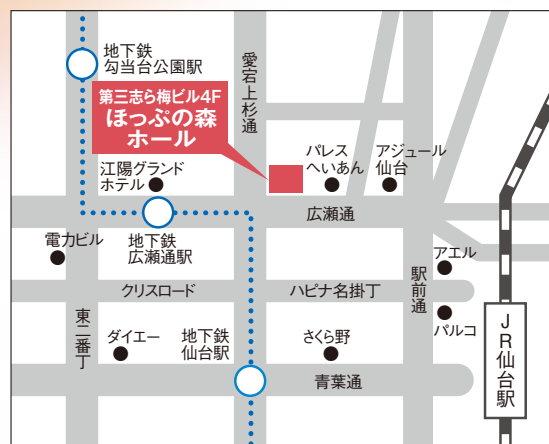
1961年生まれ。朝日新聞記者。ロゴセラピスト。

東京社会部が長く、編集委員、雑誌AERA副編集長、文化部次長、甲府総局長などをつとめる。

2011年春、朝日新聞の連載「ニッポン人脈記」で、「生きること」と題して、フランクフルをめぐる人々のことを書く。

その取材がきっかけとなり、ロゴセラピーを学ぶ。

ほかの著書に、『犯罪被害者——いま人権を考える』『「犯罪被害者」が報道を変える』(高橋シズエと共同編集)『戦争と検閲——石川達三を読み直す』。



- 地下鉄広瀬通駅東2出口より徒歩約3分
- JR仙台駅西口より徒歩約10分

■主催／仙台フランクフル文庫

■協力／特定非営利活動法人 ほっぶの森

お問い合わせ

仙台フランクフル文庫(ほっぶの森内) ☎090-3123-6363 (白木)

お申し込み

下記にご記入の上、FAXにてお申し込みください。

FAX.022-797-8802

申込締切

平成29年5月15日(月)

大変申し訳ありません。会場の関係で
申込み先着**50名様**とさせていただきます。

お名前

ご連絡先

E-mailアドレス



「それでも人生にイエスという」

ロゴセラピーは、「夜と霧」の著者、V.E.フランクルによって創始された、「意味(ロゴス)」を中心として進められる心理療法です。ロゴセラピーでは、どのように生きることが意味のあることなのか、今いる状況での課題は何なのか、人生に意味を見出せないで悩んでいる人たちと一緒に、意味のある生き方を探し、癒しの可能性を求めます。「いかなる状況にあっても人生には意味がある、人生にイエスと言うことができる」と考えます。

1946年「死と愛」(原書)初版(原題「医師による魂の癒やし」)



仙台フランクフル文庫とその背景

ナチスドイツ強制収容所の体験記「夜と霧」や「それでも人生にイエスと言う」などの著書で知られるオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクル(1905～1997)が、第2次大戦後、家族を亡くした絶望のなかで書いた本の初版が、ウィーンのフランクルセンターから「震災後の日本」へ贈られた。

1946年に出版された「医師による魂の癒やし」で、日本語訳は「死と愛」(霜山徳爾訳、みすず書房)として1957年に出ている。

ユダヤ教徒だったフランクルは、新婚の妻や両親と強制収容所に送られた。書きかけの論文原稿も没収され、四つ目の収容所で米軍に解放された。しかし再会を夢見て帰ったウィーンで、母はガス室で殺され妻は収容所で解放後まもなく死んだことを知る。

悲嘆のなか、失われた原稿を書き上げたのが、この本だ。収容所で、フランクルは小さな紙に本の構想をメモすることで生き抜いた。どんな時にも生きる意味はある、それは追い求めるものではなく、刻々と問われることに応えることの中にある、と説いたフランクルが、生きる意味や苦悩の意味、愛の意味について書いた、戦後の出発点。亡き妻へ捧げられている。

フランクルが提唱したロゴセラピーを継ぐ1人で、ドイツに住む勝田茅生さんに2011年夏、この初版本が託された。フランクルセンターの理事たちからの手紙がついていた。

〈かつてオーストリアも非常につらい時期がありました。この作品は当時の大災害のなかから生まれ、世界中の人たちに多くの善いことをもたらしたのです。被災された方や日本の人たちに「それでも」の力が与えられるよう願っています〉

勝田さんが仙台や東京でロゴセラピー入門ゼミナールを始めて10年。仙台のロゴゼミ受講生たちが、勝田さんから、この初版本を受け取った。障害者の就労支援をする特定非営利活動法人「ほっぷの森」の白木福次郎理事長らが、本を修復し、2012年5月に「仙台フランクフル文庫」を設けて、展示を始めた。

フランクルは、この「医師による魂の癒やし」に、晩年まで手を入れた。加筆された最終版は、「人間とは何か」(山田邦男監訳、春秋社)という題で2011年に翻訳出版されている。



仙台フランクフル文庫(ほっぷの森内)

(2012年6月9日朝日新聞夕刊の記事に補足 編集委員・河原理子)

仙台フランクフル文庫では、これまでに4回、講師の先生をお招きしてロゴセラピー講演会を開催いたしました。

第1回 講演 (2014年9月20日開催)

講師 草野 智洋氏

- ・臨床心理士
- ・日本ロゴセラピスト協会認定 A級ロゴセラピスト
- ・静岡福祉大学社会福祉学部 専任講師
- ・静岡県息こもり支援センター スーパーヴァイザー



テーマ **生きる意味を
見つけるために**

ロゴセラピーとは「他者を変化させるための技術」よりも「自分自身の生き方」に関わるものです。ロゴセラピーの世界観や人間観を自分のものにし、自分自身の人生を意味あるものにしていこうとするセラピストの態度が、クライアントの力になります。

第2回 講演 (2015年6月13日開催)

講師 山田 圭輔氏

- ・麻酔科専門医
- ・ペインクリニック専門医
- ・ロゴセラピスト
- ・金沢大学医薬保健学域医学系 麻酔・蘇生学講座 准教授
- ・金沢大学附属病院に「がん哲学外来」を開設



テーマ **ロゴセラピーを基盤とした
がん哲学外来**

がん研究がどれだけ進んでも、人には最後に死ぬという大きな仕事が残る。がん医療には科学だけでなく、哲学的な考えを取り入れる必要がある。がん哲学外来とは、がん患者の心の苦痛(スピリチュアルペイン)を軽減することを目的とする。死に向き合わずして、究極の心の安定は成立しない。

第3回 講演 (2016年2月20日開催)

講師 渡辺 祥子氏

- ・フリーアナウンサー
- ・朗読家
- ・日本ロゴセラピスト協会認定 ロゴセラピスト
- ・2014年8月にTOブックスより「3.11からのことづて～災後を生きる人たちの言葉～」を出版



テーマ **フランクルの言葉
～「3.11からのことづて」によせて～**

東日本大震災の被災の地で懸命に生きる人々の姿は、まさに、「それでも人生にイエスと言う」姿です。この方々の生き方や、災後この地で繰り広げられた、世界中の人々との心の交流の中に、私はロゴセラピーの精神を見ました。これは、未来を生きる人々の教科書になる!! と確信し、こうして語り続けています。

第4回 講演 (2016年9月4日開催)

講師 中谷 剛氏

- ・ポーランド在住
- ・アウシュヴィッツ博物館公認ガイド
- ・日本人訪問者にアウシュヴィッツの歴史を伝え続けている
- ・著書に「新訂増補版 アウシュヴィッツ博物館案内」など



テーマ **日本人から見た
アウシュヴィッツ**

国境を超えて多くの民族が共生・共存する地域が広がる中で人びとは不安を感じている。グローバル化に適応する精神とそれを養う教育が必要だが、アウシュヴィッツ見学はその機会のひとつになる。次世代の人びとが現在、そして未来の責任を果たすためにアウシュヴィッツがある。